

## 男子部中等科・高等科

### 「多様性のある社会をデザインする」

高野 慎太郎

「社会変容を促す探求実践」の様相を報告する。特徴は「オープンコード」「メタ・ディスカッション」「表象実践」にある。なお、「多様性に関する教育モデルの創出」を研究課題とする生徒からの要望を受け、本稿では、多様性教育の研究に対しても一般化可能な抽象水準での記述を心がけた。

#### I. 背景

「多様性」をテーマとした課外活動が2017年に始まった。生徒の発案で、国語の授業内容(「LGBTと人権」など)を深める場として始まり、放課後や休日を利用して活動してきた(1)。前回(2017年)の「学業報告会」期間も探求が継続された(2)。今回(2019年)は25名が参加し、前回と同じように、多様性グループの中に、関心に応じた小グループを結成して探求を進めた。「多様性のある社会のデザイン」という旗印のもと、生徒と教師で社会に働きかける探求活動の理論と実践を報告する。

#### II. 「多様性」の概念規定

「多様性」という言葉の一般化に伴って、様々な誤解が生じている。本プロジェクトの趣旨に関わるため、多様性概念について、ここで簡単に整理する。「多様性」の語用をめぐっては、次の2つの類型がみられる。「混沌の多様性」と「統合の多様性」である(3)。「例外/秩序」の類型で記せば、前者が例外状況、後者が秩序状況にあたる(4)。

「混沌の多様性」の例を引く。1960年代のニューヨークには政治的、芸術的、性的マイノリティが集結しており、街は混沌の最中であつた。しかし、混沌によって文化的・政治的な創造性が創発された。当時を知るボブ・ディランの表現を借りれば、「何でもありにもかかわらず、なぜかすべての辻褄が合ってしまう」状態であつた(5)。

混沌が創造性に繋がるのはなぜか。混沌によって生じた声(Voice)と視座(Perspective)の輻輳化(多声化・多視座化)が「ミメシスとエクスタシス」を引き起こすためである。ちなみに、近年話題の自己組織化やtealと呼ばれる複雑系の組織論は、

こうした状況を人為的に構築する立場を指す(6)。

他方、「異質性」を梃子とした社会統合を計る発想を「統合の多様性」という。東京オリンピック(2020)の標語(Unity in diversity)から知られるように、「統合の多様性」とは、公共空間の創出を目指して用いられる行政学的な概念である。

ただ、university (unity)とdiversityが対義語の関係にあることから予見されるように、「統合の多様性」は原理的な不可能性を孕む。したがって、「多様性による統合」という語用には、社会設計に対する再帰的な意志、つまり、無理を百も承知の上で敢えて試みるという意志が含意されるのである。本プロジェクトは、混沌による輻輳的な感受性を基盤としながら、社会統合に必要な公共性(社会設計)の議論を展開するものである。

#### III. 本プロジェクトに求められるもの

「みんな違ってみんな良い」と誰もが素朴に言えるためには、背後に緻密な社会設計が不可欠である。サンステーションの枠組みを借りて、社会に対する人々の態度を一階/二階と区別しよう(7)。

自分らしく生きる一階/誰もが自分らしく生きる社会をつくる二階。自己実現に勤しむ一階/人々の自己実現のプラットフォーム維持に勤しむ二階。一階の主語は私/二階の主語は私たち。

多様性教育は社会統合に纏わる教育であるから、社会設計(二階)に照準した議論が求められる。問題となるのが、議論への参入経路の保障だ。巷で見られる「この指とまれ方式」の教育設計では、判断の前提(指に気付く/気付かない)段階において選別がなされる。畢竟、指にとまる者はとまり続け、とまらない者は永遠に指を見過ごし続ける。

そこで、私は入口と出口を分ける戦略を採る。「間違えて指にとまる」が如き不意打ち的な参入契機を設計するのである。例えば、本プロジェクトは如何なる研究対象をも歓迎している。「バンドやりたい」「プリン作りたい」という一階の自己実現を期待して参入してくる生徒と共に、二階(公共性)の議論へと駆け上るのである。ただ、生徒を一階で待ち構える教育設計には、「羊頭狗肉」の危険が伴う。予防策として、私は明示的な自己言及——「教育に関する教育」——を繰り返す。つまり、本プロジェクトのプラットフォーム(教育設計)自体を自己言及的に主題化することによって、生徒からの分析(批判)の俎上に載せるのである。

#### IV. 本プロジェクトの問題設定

社会設計に伴って生ずる、設計者側の恣意的な含意を如何に排除するか。レッシングは、社会設計の「コード」を常に参照可能にしておくことが重要とした(8)。ただ、人々にコードを参照する動機が生まれなければ、オープンコードの意味はない。我々の問題設定はここにある。自身が立つプラットフォーム自体を疑うことから(メタ・ディスカッション能力)、そして、必要に応じてコードの変更を社会に働きかけるから(表象能力)に照準した教育を(生徒と教師で)つくり出すことが、本プロジェクトにおける教育学的な問題意識である(9)。

個別的な(ベタな)議論に拘泥する限り、コード参照への(メタな)動機は涵養されない。コード参照動機を育むためには、<「個別的な議論」の前提となるプラットフォーム>自体に照準した議論、即ち、メタ・ディスカッションの訓練が求められる。我々が行ったSDGsに関する議論を例にとるならば、SDGs自体を議論するのではなく、SDGsという言葉を用いる人々が何を欲望しているか、あるいは、SDGs論者が(無)意識的に特定の論件——ラトウーシュ「脱成長論」など——を見落とすのは何故なのか、について議論するのである。

メタ・ディスカッションによって新たな知見が得られた場合は、各分野に対するオルタナティブ(代案)の提起を始めとする「社会活動」に取り組むこととした。ただ、社会活動についても「メタ・ディスカッション」から開始した。過去に、中高生による社会活動は数限りなく為されてきたが、

それが社会に影響を与えないのはなぜか。また、そうした活動が持続していないのはなぜなのか。

私たちはその理由を「気象予報」との類比で理解する。気象予報士は気象に関する高度な分析力や表現力を持つが、実際の天気そのものに影響を与えることはない。仮に、物事を正しく読み解いたり、正しく考えたり、正しく表現するちからを「読解力」「思考力」「表現力」と呼ぶならば、そうしたちからは「気象予報」のためのものである。私たちは、実際に実際的な影響を与えることを企図した言語実践のことを「表象実践」と呼び、そのために必要となる「言語による社会に対する操作性」のことを「表象能力」と呼称する。社会に真に働きかける教育を構想するためには、「メタ・ディスカッション能力」と「表象能力」を育む実践が生徒と教師によって創出される必要がある。

#### V. 活動の概要

主な7つの活動について、以下に概要を示す。括弧書きの番号は、次章の成果一覧に対応する。

##### 【性の自分らしさを考えるプロジェクト】

2017年からの継続研究である。今回は「多様性教育」という概念の一般化を目指した。過去の活動について、教育学的な視点から整理し、汎用性を持つ抽象水準において発信することによって、多様性教育の発信を行った。中高生向けシンポジウムの開催により若者へ、学会報告で学術界へ、本活動の教科書への掲載によって教育行政への働きかけを行った。(成果：①②③④⑥⑦⑨⑩)

##### 【ウルトラマンから考える変身できる社会】

2017年からの継続研究である。ウルトラマンが大好きな高校生が行った。これまで、円谷作品の意匠を借りて「相対悪」や「熟議」の視点を学内外で提案してきた。今回は「主体変様」(黒田正典)「なりきり」(ヴィヴェイロス・デ・カストロ、ウィラースレフ、宮台真司)などの概念を翻案して、「変身」という表象を「相手の視座と声への変性」と定義づけ、「変身する感受性」を習得するための教材として、円谷作品の活用方法を提案した(10)。(成果：①③④⑨)

##### 【平和のラップ・未来のロックをつくろう】

音楽好きの高校生が書籍“Wounded Tiger”(T. Martin Bennett)からインスパイアされたラッ

プを制作した。本書は、真珠湾攻撃の際の指揮官で、その後クリスチャンとなり平和活動を展開した淵田美津雄の生涯を描いたノンフィクション作品である。文献研究、著者への取材を経て、戦争のさなかに残された民主主義をテーマとして“December 7th”というラップを制作し、発表した。

制作に先立って、ベンヤミン「平和商品」の輪読と平和教育に関する検討を行った(11)。目的は、日常的な有効性を持つ平和教育の前提条件を探ることにある。ベンヤミンを翻案すれば、イベント的な平和教育は「平和商品」として消費されるに過ぎない。呼吸や食事をするように、ごく自然と我々の身体感覚に染み入り、日常空間に持ち越されるようなものとして、平和(教育)は構想されなければならないのである。

そこで、ラップの持つ感染力、即ち、「ミメシスとエクスタシス」を借りる方法をとった(12)。社会的な問題提起をラップに乗せることで、そうした問題意識が日常性を獲得することを企図するものである。また同様の発想から、香港民主化デモに関するラップ“umbrella”も制作した。この楽曲は、デモにおける参加者と鎮圧側を音楽的に行き来するような構成になっており、先述の「他者への変身」概念を音楽的に翻案したものである。

楽曲は末尾に掲載した URL から YouTube を通して視聴することができる。なお、楽曲の制作にあたっては、宗教社会的なフィールドワークを実施したことが大変印象深い、紙幅の都合でここでは省く。(成果：①④⑨⑩⑫)

#### 【剣道・武士道・多様性】

2019年4月からの継続研究である。剣道部員が行った。剣道をめぐる人々の態度には、スポーツとしての剣道と、武道としての剣道という2類型がある。筆者が顧問として携わる本学剣道部においては、「士」の生き方を示す「先憂後楽」という北宋の故事を合言葉として、剣道を通じた武士道探求の立場をとる。そのため、稽古だけでなく、他競技(柔術)とのコラボレーションや、武士道に関する理論研究、社会活動なども行ってきた。

本プロジェクトでは、内村鑑三の武士道論に着目した。キリスト者の内村が武士道を標榜した理由については諸説あるが、生徒の仮説は、内村の武士道論を機能的武士道論とみるものである。背

景には近代化がある。近代化に際して、海外ではキリスト教が近代化を駆動した。一方、日本ではキリスト教が弱いため、キリスト教に代替する価値観を誂えねばならなかった。そこで、内村は機能主義的に武士道を称揚したのではないかと考える。つまり、「2つのJ(Jesus and Japan)」を強調して、武士道論を展開した内村の言説背景には、社会統合の必要性があったのではないかと考える。

こうした内村流の武士道論は「武道を通じた社会統合」、即ち、武道を通じた公共性の議論へと道を拓くだけでなく、公共性の議論へとコミットする剣道部という部活動の在り方を示唆する。

実践として、相模国際学院との文化交流を計画した。相模国際学院には世界中から留学生が集まる。剣道と茶道を通じた文化交流を企画したが、日程の都合で実現には至らなかった。いずれ機会を改めて実施する予定である。(成果：④⑤⑧)

#### 【“THE LABEL -STORIES OF FOREIGNERS-”】

海外にルーツを持つ高校生が、自身の父親へのインタビューを行い、ショートフィルムにまとめた。テーマは「ラベル」である。この作品では、「日本で生きる」ということを改めて問い直し、日本社会における境界線の存在が描き出される。映像は末尾に掲載した URL から、YouTube を通して視聴することができる。(成果：①⑨⑫)

#### 【プリン de 多様性】

スイーツ作りが大好きな高校生が、多様性を促すプリン作りに挑戦した。人は、体内の水分量や血糖値から、思考や気分に大きな影響を受ける。逆に、そうした生体環境に作用するスイーツをつくることで、「無理を可能にする」こともできる。

「差別やヘイトよりプリンを食べよう」のコンセプトのもと、糖分量や風味や口当たりを工夫して、多様性をアフォードするプリンを考案した。我々も試作品を食した。多様性グループの成果は、彼のプリンによる生体作用に負うところが大きい。

#### 【地球温暖化の背景を探る】

環境に関心を持つ中学生が、地球温暖化について調べたことをまとめた。主に文献研究を行い、温暖化の原因や対策を模造紙にまとめ、掲示することができた。カラフルなイラストを手描きするなど、視覚的な効果を狙った表現も含んだ力作が完成した。今後の探求にも期待したい。

## VI. 成果

### 【学会発表】

① 日本キャリア教育学会シンポジウム「多様なキャリア形成を考える」. 2019年11月23日.

### 【シンポジウム開催・研究発表】

② 「第1回 SDGs エコフォーラム in 埼玉」にて、分科会「若者と市民の環境会議～SDGsから素晴らしい未来を語ろう～」を開催. 2019年12月14日.

③ 東京都東久留米市と協働で公開講座「シネマ de おしゃべり～高校生と考える性の多様性～」を開催. 2019年12月8日.

④ 「世界子どもの日ユースフェスティバル2019」にて分科会「多様性のある社会をデザインしよう！」を開催. 2019年11月16日.

### 【掲載・執筆】

⑤ 「特集エピソード 道しるべ②」『月刊 剣道日本 2020年5月号』株式会社剣道日本, 2020.

⑥ 『中学社会 公民 ともに生きる』(中学校社会 公民教科書) 教育出版, 2020. (図表1参照)

⑦ 「持続可能な社会をつくる教育とはなにか」『第1回 SDGs エコフォーラム in 埼玉 報告書』SDGs エコフォーラム実行委員会, 2020.

⑧ 「巻頭言」『月刊 剣道日本 2020年1月号』株式会社剣道日本, 2020.

⑨ 「教員こそ理解深めて LGBT シンポ開催」『朝日新聞 2019年12月17日朝刊』朝日新聞社.

### 【研究協力】

⑩ 長澤愛枝「性の多様性の認識・理解を目指して一事例研究と実験研究による検討―」令和元年度鎌倉女子大学大学院児童学研究科児童学専攻修士論文, 2020.

### 【作品制作】

⑪ ラップ <https://youtu.be/Gjalywyc58k>

⑫ ロック <https://youtu.be/BPINPDop-u8>

⑬ 短編映画 <https://youtu.be/j012HEL6jA>

## VII. 振り返り

学業報告会を終えた後、探求活動を振り返ることを目的として、生徒へのインタビューを行った。紙幅の都合から、ここでは2名の語りを紹介する。

まずは、「平和のラップをつくろう」というテーマで研究した生徒へのインタビューを紹介する。

最初は表現をやろうと思って、多様性グループに入ったんですけど。多様性グループは、名前の通り多様で。最初はほっとかれるのかと思ったりしましたが、僕たちの関心とか、気付いたことが繋がって、先生とか多様性グループの他の人とかから色々な議論とか、考え方を紹介してもらって、議論のレベルがだんだん上がっていき感じがしましたね。多様性とか、社会設計とか、平和教育とか、新しい発想をもらって考える中で、“Wounded Tiger”と繋がって。

他者の影響を受けながら、生徒の表現への関心は“Wounded Tiger”という書籍へと繋がった。

もともと英語の授業で知った本なんですけど、多様性グループの発想とこの本がマッチしたかなど。メタとベタっていう視点で、平和教育とか、ラップとかを考えたんで、「ラップを使って何を表現するか」みたいな視点になったのが大きいですね。それと、Bob Dylanの歌詞の分析とか、聖書を読み込んだりしたのもラップの歌詞に繋がって。国語の時間に書いてきた詩もあったので、ぜんぶが繋がってラップで平和を実現しようってなった感じですね。

「メタ・ディスカッション」を経たことで、ラップを捉える視点が広がっていることが分かる。

社会で起きてる問題とかニュースを見て、どうやって表現しようかなって考えるようになりましたね。いまもBlack Lives Matterとか、いろんな出来事をラップにしています。国語の時から、報告会を通して、ずっと毎日詩を書いていたので、いまさらやめられないっていうか。

続いて「ウルトラマンから考える変身できる社会」というテーマで研究した生徒のインタビューを紹介する。この生徒は、数年前に国語のレポートでウルトラマンを扱って以来、社会的な文脈の中で円谷作品を考えてきた。

2017年の学業報告会のあとも、引き続き先生と考えることができたので、ゆっくり考えられたというか。自治とか、寮とか、生活の中で感じる疑問を、円谷作品を通して考えるっていうことを、続けられたんじゃないかと思います。

継続的に議論を続けることによって、生活を通して探求を深めるということが可能になっている。

学業報告会が始まる2か月くらい前に、どんな内容にしようか考えていたときは、まだ「変身」というコンセプトは出てなくて。ただ、前回の学業報告会で「対話」について発表した時に、「対話」の前提は何かという課題を指摘して頂いて。そのときから、「対話」の前提になるものが何だろうか考えてきたので、今回の学業報告会でいろんな文献とかを読んだり、いままで作ってきたプレゼンを見てもらったりして、そのなかで最終的に「変身」というコンセプトに行き当たった時は感動しましたね。

新たな文献や他者との応答によって、2年越しの問いに答えが出たことの「感動」が語られた。

実は、いまもプレゼンを作っているんです。ウルトラマンZを入口にして、善と悪の境界線をテーマに考えていて。前に先生とお話したことですが、善と悪っていうのは明確に分けることが出来なくて、境界線があいまいで。いまこそ、そういう感覚が大事なんじゃないかと思って、プレゼンを作っています。

男子部を卒業したいまでも、生徒は、円谷作品を通して社会を考えるとという営みを続けている。

VIII. 謝辞

最後に、活動を支援してくださった方々にお礼を申し上げたい。生徒に研究発表の場を与えてくださった三村隆男先生、インタビューに応じてくださった月岡洋光様、永松教孝先生、浅井春夫先生、シンポジウムを共催してくださった皆様、広島から応援に駆け付けてくれた福富優一さんには、厚く御礼を申し上げ、ここに深謝の意を表したい。

註

- (1) 詳細について、生徒による以下の文章を参照。木村翠「多様な意見を聞くとワクワクする」『子ども白書 2019』かもがわ出版、2019。
- (2) 前回の活動内容について、高野慎太郎「多様性のある社会をデザインする」(『自由学園年報 第 22 号』学校法人自由学園、2019)を参照。
- (3) 詳細について、高野慎太郎「生き方としての多様性教育について」(『早稲田キャリア教育研究 11』早稲田キャリア教育研究会、2020)を参照。
- (4) Carl Schmitt, *Politische Theologie: Vier Kapitel zur Lehre von der Souveränität* (Duncker & Humblot, 1934)
- (5) Ian Bell, *Time Out of Mind: The Lives of Bob Dylan* (Pegasus Books, 2014) 訳出は引用者による。
- (6) Frederic Laloux, *Reinventing Organizations* (Lightning Source Inc, 2014) 鈴木立哉訳『ティール組織』(英治出版、2018)
- (7) Cass R. Sunstein, *Second-Order Perfectionism* (Fordham Law Review Vol. 75, 2007) 那須耕介訳「第二階の卓越主義」(那須耕介編『熟議が壊れるとき 民主政と憲法解釈の統治理論』勁草書房、2012)
- (8) Lawrence Lessig, *Code and Other Laws of Cyberspace* (Basic Books, 2000) 山形浩生ほか訳『CODE』(翔泳社、2001)
- (9) 詳細について、高野慎太郎「社会とは、受け入れるものではなくつくり出すもの」(『月刊社会教育 2020年5月号』旬報社、2020)を参照。
- (10) 「主体変様」について、黒田正典「主体変様の認識と客観的認識」(『心理学の哲学』北大路書房、2002 所収)、「なりきり」について、ヴィヴェイロス・デ・カストロ『食人の形而上学』(洛北出版、2015)、レーン・ウィラースレフ『ソウル・ハンターズ』(奥野克巳ほか訳、亜紀書房、2018)、宮台真司(2020) <https://is.gd/69b1Qd> を参照。
- (11) ヴェルター・ベンヤミン「平和商品」『ベンヤミン・コレクション 4 批評の瞬間』(浅井健二郎編訳、筑摩書房、2007) 所収。
- (12) 米須興文『ミメシスとエクスタシス—文学と批評の原点』勁草書房、1984。

**LGRTについて考える各編生応答**

① 例、多様な生き方(生き様)「LGRT」という言葉が注目され、必死の覚悟をもち「自分らしさ」であり、一つの生き方であるという考えが広がりつつあります。しかし現状でも、LGRTに対する差別や偏見は完全に消えなくなっています。当事者として苦しんでいる人がいます。

② 2017年、東京都のある中学校で、LGRTについて考える会が実施されました。きっかけは、当事者を友人にもつ生徒でしたが、LGRTについて真剣に考えたいと願ったことです。性に関する文章を渡り、当事者や関係者に話を聞くことになり、生徒たちは考えを深めていきました。

③ LGRTの人々に対する差別や偏見の実態を知り、生徒たちは驚くことに、「LGRTのような(自分らしさ)に誇れる瞬間は、全ての人は持つ可能性があるよになりました。そして、誰もが自分らしく生きることのできる社会の実現に向けて、地域のイベントや市民講座で学習成果を発表

るなど、社会に働きかける活動をするよになりました。

④ 関係者(先生)からは「男子部の問題については考えているのか」といった批判的な意見を聞けることもありました。この経験から、生徒たちは「当事者の人たちは、こういう社会の中で生きていけるんだ」と、現状の厳しさをより深く理解し、社会への働きかけをさらに進めていく原動力になりました。

⑤ 活動の場は小学校の教室にも応じています。生徒たちは、小中学生向けに「自分らしく生きるとってどうしようかな?」というテーマで話し合ってきました。LGRTの存在を聞き、自分の個性が人と違うとわかったときの気持ちや、強弱してはしゃぐ手助けなどについてインジュー形式で聞くなど、交流や体験を通じて小中学生に考えてもらうことができました。関係者(先生)や学生はLGRTの問題がきっかけとして、誰もが自分らしく生きることが必要かを考えたい」と話しました。



図表 1 本活動が掲載された公民教科書